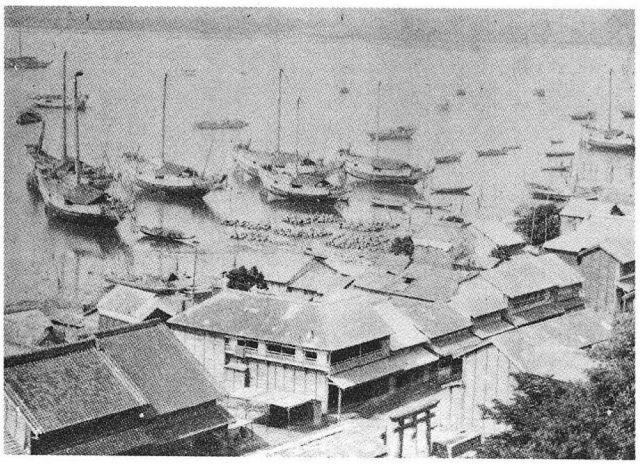
開港のひろば
YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS



文久元年（1861）の神奈川湊。洲崎明神前の渡船場を撮影したもの。
（撮影者ガワーについては、本紙7頁参照）

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地　〒231　電話(045)201-2100
発　行　日/平成2年5月3日
印　　刷/㈲三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第020055号　類別・分類C-BE160

展示資料の中から

幕末期の神奈川湊

ここに掲げた写真は、文久元年（一八六一）にAbel A.J.Gowerが撮影した神奈川湊である。現存する神奈川湊の写真の内、最も古いものであり、幕末期の湊の実態を現在に伝える貴重な資料である。そこで、ここでは、この写真を利用して、当時の神奈川湊の様相を眺めてみたい。

では、最初に、この写真が写された地点を確定しておこう。この写真にはPORT OF KANAGAWAというタイトルが付されているが、具体的にこのタイトルから地点を確定することはできない。

しかし、写真に鳥居が写されていることから考え、この場所は神奈川宿青木町宮之町の洲崎明神付近と推定できる。この地点には幕末期に横浜町への渡船場が置かれ、撮影者もこの地点に立ち寄ったものと思われる。

また、貞秀の浮世絵や『江戸名所図会』などにも、この地点を描いたものがあり、この写真との比較が可能である。これらの絵は、いずれも、写真と似た情景を描き、この写真が宮之町の渡船場付近であることを推測させる。

では、次に、写真から気が付くことを一、二あげてみよう。まず、第一に指摘できることは、大きな廻船が陸地近くに停泊していることである。写真が鮮明でないため断言はできないが、これらの船には「棹走り」（五大力船などの小さな荷物運搬船に付けられている舷側の台のこと）がみられず、写真の船は弁才船と呼ばれる大型船（外洋船）のようである。

また、喫水線の状態からみて、これらの船は荷物を積んでおらず、空船で停泊しているようである。つまり、この写真は、江戸湾の外から入って来た廻船が、神奈川湊で荷物を下したところを撮影したものといえる。

従来、物資が陸揚げされた場所については、必ずしも明らかではなかったが、この写真から洲崎明神のすぐ前まで大型船が入り、物資を小船に積替えていたことが判明する。

ところで、この湊については、明治一三年（一八八〇）の統計があり、大量の小麦・塩・米・酒・醤油などが取引されていたことが分かっている（『神奈川県統計書』）。また、安政六年（一八五九）のある記録は、貿易の開始に伴い、菱垣廻船が神奈川湊に入港するようになり、大坂・兵庫から送られる物資（綿布・水油・紙・薬種・小間物など）が、この湊に陸揚げされるようになったことを伝えている（『神奈川湊廻船問屋関係文書』）。

おそらく、写真は、こうした廻船を写したものと思われる。

このほか、写真には東海道に沿って倉庫らしきものが写されている。寛政三年（一七九一）のある史料によれば、神奈川湊に出入りする物資は、一旦、廻船問屋の倉庫に入れられ、その後、商人と廻船との間で取引が実施されることになっている。したがって、船着場の近くに、こうした倉庫があったはずで、写真の倉庫が、これに当たるのかもしれない。さらに、廻船問屋は、享保六年（一七二一）以降、浦賀奉行所に命じられ、廻船荷物の検査を行なっていた。そのため、湊には廻船問屋の詰所もあったと思われる（廻船問屋については、『横浜開港資料館紀要』第四号の拙稿を参照）。これらの点については、今後、文献資料を参考にしながら、明らかにしたいと思っている。

（西川武臣）

座談『江戸湾の歴史』展に寄せて

今回の座談は、下山治久さんと福島金治さんのお二人を迎えて特別展『江戸湾の歴史―中世・近世の湊と人びと』にちなんでお話しをしていただきました。下山さんは、横浜市の歴史博物館準備室にお勤めですが、戦国大名後北条氏研究の第一人者でもあり、最近は中世の江戸湾についての研究もされています。福島さんは神奈川県立金沢文庫にお勤めで、称名寺領の研究を通じて、江戸湾内の中世の流通について研究されています。

西川　まず最初に中世の江戸湾についての研究史からお話し願えますか。

下山　古代から中世の江戸湾については『横浜市史』第一巻で湊の機能、海上権益の問題について、中丸和伯氏が触れたのが一番古い成果だと思います。ほかには後北条氏の水軍について扱ったもの、房総半島の里見氏のほうから海上交通を検討した研究などがあります。これらの研究には江戸湾内の水軍について検討したものが多いのですが、この頃では江戸湾をこえて東海地方や伊勢・志摩との物資流通に目を向けた研究もあります。

ところで、今回の展示のタイトルは『江戸湾の歴史』とされたらしいですが、実は「江戸湾」という言葉は中世末期まで、古文書や記録には全然出てこない文言で、「海上」とか「海」としか書かれていません。中世の人たちが江戸湾をどういうイメージでとらえていたかは、研究の上でも大きな問題だと思います。

西川　では、次に、現在の横浜市域に当たるところの中世の流通拠点とか支配の構造などについての研究はいかがでしょうか。

福島　これまでの研究では、鎌倉の外港として六浦湊（金沢区）が位置づけられ、この湊については、北条氏と湊の関係、物流、人の流れなどといろいろな研究がされています。しかし、その他の湊については、最近になって品川湊と東海地方との交流を明らかにした研究などが出ましたが、詳細はこれからだと思います。今後、江戸湾の一つ一つの湊について調査を進めると同時に、江戸湾全体を眺めた研究が必要だと思います。例えば、外から鎌倉に入る船の荷はわかっても、鎌倉からでていく船荷が何なのかはよくわからないのですから。

下山　そうですね。とは言っても、いくつかの湊については概略がわかります。たとえば、中世には品川湊（東京都品川区）や神奈川湊（神奈川区）が流通の拠点としてかなり使われています。また、羽田（東京都大田区）とか杉田（磯子区）などの小さな湊は、土豪たちが蟠居し、その力をふるった水軍の基地としての性格を持っています。

福島　それと江戸湾岸で目立つのは、洲崎神社が各地にあることです。横浜市域にも神奈川と六浦にありますが、安房の洲崎神社は平安時代の社で、江戸湾内の古い信仰形態を示すとともに、それ自体が流通拠点であったり、潮見の場所であったと考えられます。江戸湾内では砂洲でできた場所が、大きな湊になった地だと思うのです。

西川　今のお話しを聞いていると、六浦湊や神奈川湊については、かなり古い時代からのことがわかりそうですが、もう少し具体的にお話し願えないでしょうか。たとえば、鎌倉時代に船で運ばれた物資にはどんなものがあったのでしょうか。

福島　いちばん重要なのは寺の造営用の材木です。鎌倉周辺は雑木だけで、津久井の材木を相模川沿いに下し、平塚から三浦をまわって六浦に上げたり、鎌倉の海岸に直接上げたりしています。材木は房総からもたくさん入ってきています。こういった土地は北条氏の得宗関係の所領です。

西川　穀物の流通経路についてはわかりますか。

福島　鎌倉幕府の政所が交易所を相模国内に設けており、相模・武蔵の御家人の所領から、穀物などの物資が鎌倉に送られています。

西川　経路は材木と同じですか。

下山　それもありますが、相模の米どころは、おもに中郡の秦野（秦野市）あたりですから、陸送、すなわち鎌倉道を馬で運ぶ方が実際的でしょう。また、その他の食料品や馬の飼料、さらには、軍事物資も、こうした経路で鎌倉に搬入されたようです。

福島　つまり、鎌倉を経済的に支えたのが、こうした鎌倉周辺の農村地帯だったことになりますね。ところで、鎌倉の都市圏がどこまでであったかということを、文書に出てくる「田舎」という言葉で考えてみたことがあります。そうすると、鎌倉の人にとって江の島より西は田舎だが、東の方はあいまいで、今の横浜市域の六浦は「田舎」に入ってなかったようです。鎌倉から六浦へは、一時間程度の距離ですし、景色も良く、鎌倉の人々の遊興地でもあったようです。六浦周辺は鎌倉に含まれる「都市」の一部だったんですね。

下山　頼朝も、鎌倉の背後に位置する良港の六浦を意識していたかもしれませんね。それと、男世界の船乗りが鎌倉という華やかな都市に入ってくると町が荒れるので、鎌倉には、直接入れないように配慮したのではないですか。

西川　おもしろいですね。六浦周辺が、横浜市域最大の「町場」だったのですね。そうした状況は、その後、どうなるのですか。今度は、南北朝時代から室町時代のことについて、お聞きしたいと思います。

下山　室町時代に入っても鎌倉には足利氏の鎌倉公方がいて、依然として関東の中心でした。さらに、室町中期頃から資料に子安（神奈川区）・蒔田（南区）などの小さな湊が現われます。一方、土豪たちの状況を見ると、本牧（中区）に平子氏、蒔田に吉良氏などが居ますが、彼らがどういう形で湊を支配していたのかという問題や房総半島の里見氏などが、どのように勢力をのばして来たのかについては、よくわかっていません。

下山治久氏

福島　この時期の神奈川湊の状況を考える上で興味深いのは、神奈川湊の洲崎神社にあった鐘が、飯山（厚木市）の鋳物師によって鋳造されていることです。この鐘は応永六年（一三六八）のものですが、内陸部と神奈川湊との交流を示すものと思います。金沢文庫の文書でも、称名寺の金堂造営に際して神奈川湊で釘などを買っていますが、これと厚木の鋳物師の関係にも興味がもたれます。

また、房総半島の木更津に高柳というところがあり、ここも古くからの鋳物師の拠点で鎌倉の造営に関っていると思います。下総国には千葉氏の流れをくむ大須賀氏というのがいて、対岸の六郷（東京都大田区）を所領にしていました。そして、称名寺の塔頭の大宝院にも関与し、その後、門前の小代官になるようですので、今の金沢区の町屋や寺前の鍛冶職とのつながりが推測されます。江戸湾の人の交流は今までは、武士や僧侶の動きで考えられていましたが、浦に集まってきた職人が対岸とどういう関係にあったかというのも、おもしろい問題だと思います。

西川　六浦周辺や神奈川湊については良く分かりましたが、次に、もう少し小さな湊についてもお話し願えますか。こうした小さな湊について実態が判明するようになるのは、南北朝時代以降でしょうか。

下山　ええ、土豪の史料が出てきますからね。

西川　小さな湊というとどこになりますか。

下山　羽田、本牧、杉田といったところです。南北朝から室町時代になると日用品の流通などについてもわかってきます。たとえば、瀬戸内海経由で博多方面との交易が盛んになったことが、中国大陸の景徳鎮の焼物などが関東南部の城址などで発掘されていることからもわかります。ルートとしては、伊勢の大湊を経由しているのが注目されます。

福島　それに加えて、船についても具体的に分かるようになります。たとえば、房総半島の木更津や君津のような小さな湊にも交易用と見られる海舟が知行の対象となっていたことが史料に出てきます。おそらく、江戸湾総体では、この時期に相当量の交易船があったと思われます。

西川　ところで、中世の江戸湾内の流通について考える時、鎌倉時代と戦国時代のイメージは比較的つかみやすいのですが、間の南北朝時代は、総体的なイメージがつかみにくいように思います。この点は、いかがですか。

下山　南北朝から室町時代の海に関する史料は関東地方は言うに及ばず、全国的にも非常に少ないようです。なぜ史料が少ないかというと、中央政権が失われたからなのではなく、人間が全国的に動いて史料が散らばってしまったということと、北条得宗家がつぶれたことによります。しかし、上杉の守護時代になると、個々の湊については、さまざまなことが分かってきます。と言うのは、この時期の守護政権が財源として湊を押さえていったからです。彼らは代官を派遣したり、在地の有力土豪を代官に登用するという方法で、湊を直接支配していきました。この結果、こうした関係の資料が各地に残されることになりました。

西川　具体的に、どこかの湊を取り上げていただけますか。

下山　羽田に守護大名上杉氏の代官で、行方（なめかた）氏というのがいます。この人はもともと鎌倉幕府の御家人で羽田を所領としていました。その後、守護政権である上杉氏から代官職を認められ、羽田浦の支配を任せられています。その代わり羽田浦に入る利益は、行方氏を通して上杉に吸い上げられていたのです。

西川　この時期には、鎌倉時代の鎌倉なり、戦国時代の城下町なりの大きな流通の拠点がないわけですが、それにもかかわらず、流通が活性化していく要因は何でしょうか。

下山　第一には各湊を支配する土豪の力の強さです。土豪たちが大きな経済力を持つことにより、物流が盛んになり、南北朝から室町時代にかけて急に生活状況が、現在の生活に近づいてきます。合戦の仕方もですが、食物・物品も湊に山積みされるようになります。これは、庶民レベルでも同様なことがいえます。

西川　人びとの生活ぶりがうかがえるような史料がありますか

福島　室町時代の称名寺の造営の際の人夫賃が一日五文というのが出てきます。ただし、これは労賃というのでなく、酒代とされていまして、物価からみて、豆腐一個と酒一杯が買えたということです。それから鎌倉時代の史料ですが、平瓦一枚が十文、ツルハシ一丁が四〇〇文というのが出てきます。馬は一疋、三〇〇文です。

西川　ツルハシはかなり高価ですね、普通の農民にはとても買えないですね。

福島　ツルハシは高価ですが、紙の場合、B4版位の大きさのものが一枚二文で、豆腐が同じような値段ですから安いですよね。それで室町以降、農民

の文書がたくさん残ってくるのでしょう。

西川　米の値段はわかりますか。

福島　応永二六年（一四一九）の記録に、一升あたり三三文とあります。記録によって、米の値段はさまざまですが、そんなに高くないようです。ちなみに、文安二年（一四四五）の記録に薪が一駄三五文とありますから、前の日に採った薪を鎌倉に売りにいくと、いくらかの米が買えることになります。それと炭は、一籠三〇文ほどで売れます。

西川　そうすると鎌倉に住んでいれば、一日かけて薪や炭を売りにいくと、毎日ではなくても家族に米を食べさせることができそうですね。

福島　そうですね。南北朝時代の六浦あたりのことを書いた文書には、値札のようなものが出てきていますから、町では米だけでなく、大根やこんにゃくなど、さまざまな物資が売られていたということでしょう。

西川　消費経済が発展していたということですね。

福島　ええ、そういう生活が当たり前になってきたのでしょう。薪や炭を馬で引いて売りにゆき、関所で五文払うと残った金で、米を一升買える、そんな形がこの地域の姿ではないかと思うのです。

下山　それから、船の構造と流通の変化を併せて考えてみるのもおもしろいと思います。

西川　詳しくお話し願えますか。

下山　室町中期頃の古文書を見ると船の構造を表わす言葉がいろいろと出てきます。たとえば、四つ板舟、早舟、六人積みの舟、五大力船などで、近現代でも使われる舟の名前ですね。このことは、船が積載物によって、いろいろに分化したことを意味します。また、海舟と川舟、外海舟と内海舟にも分かれてきまして、船の種類によって、所属する湊も変わってきます。つまり湊の大小で積載物が違っていたのではないでしょうか。たとえば、六浦、神奈川は、かなり大きな湊として発展し、江戸湾の外から入ってくる大きな船が停泊するような湊でした。また、杉田や羽田のような小さな湊は江戸湾内だけの湊、つまり内海交通の拠点でした。そして、もっと小さいのが各浦々の土豪が押さえるところの水軍の拠点になります。こうした変化がみられるのも、

神奈川・品川両湊に入る船に多額の入港税が課せられていたことを示す室町時代の文書。（神奈川県立金沢文庫蔵『武蔵国神奈河品河両湊帆別銭納帳』）

消費経済の発展の産物といえます。

西川　おもしろそうですね。こうした消費経済の発展は、戦国時代に入ると、より一層進むと思うのですが、戦国時代の江戸湾の問題にはどのようなことがありますか。

下山　戦国時代以前の横浜市域は、房総半島の千葉氏や里見氏などが勢力を広げていたのですが、それを完全に追い払ったのが北条早雲です。また、北条早雲が勢力を広げ、横浜市域が彼の領国に編入された時、旧来から横浜にいた土豪たちは後北条氏に内包されるか、駆逐されていったという経緯があります。たとえば、川崎はもともと、上杉氏の配下だった間宮氏と呼ばれる土豪が押さえていたのですが、後北条氏が川崎周辺に入ってくると間宮氏は後北条氏に随伴し、青木（神奈川区）に移り、さらに杉田の笹下城に三転しています。つまり、彼は、後北条氏に取り入り出世したい例だと思います。のちに、間宮氏は後北条氏の水軍の監察の副責任者のような地位にのぼり、江戸湾岸の後北条氏の水軍の管理をすることになっていきます。一方、横浜最大の流通の拠点のひとつである神奈川湊を押さえるため、北条早雲は、もともと上杉方の武将で、神奈川湊の在地土豪であった矢野氏を自らの支配下に組み入れていきます。矢野氏が後北条氏の勢力下に入ったのは、永正七年（一五一〇）前後のことで、この時期に権現山（神奈川湊周辺の高台）にたてこもった後北条氏に味方する上田蔵人を上杉勢が攻めますが、その有力な侍大将のひとりにに在地の矢野氏がいます。ところが戦いの直後に、この矢野氏は後北条氏により神奈川湊の代官に任ぜられます。さらに、その後玉縄（藤沢市）城主の北条綱成の家臣団に組み入れられます。しかし、二十年ほどで矢野氏は消えてしまい、神奈川湊は後北条氏の直轄地になってしまいます。

西川　後北条氏は横浜進出の過程で、旧上杉勢力を温存したが、後北条氏の支配が確立したと見るや、旧勢力を切り捨ててしまったということですね。矢野氏が消えてしまうのは、いつ頃ですか。

下山　永禄年間の初期（一六世紀中頃）です。北条氏綱は、勢力拡大のために、旧上杉勢を大切にしましたが、息子の氏康は上杉勢を駆逐し、直轄地化を狙い、政策を変更します。

西川　となりますと、この頃から、江戸湾内の湊は、後北条氏の直接的な支配を受けるようになったといえますね。

下山　ええ、江戸湾岸の湊については、そうです。もっとも、それ以前から神奈川は郷支配と湊の支配が分かれていて、神奈川郷は矢野氏が押さえるが、湊は代官職として後北条氏の指揮のもとに押さえるという二つの機能がありました。これは、後北条氏の支配の在り方を考える上で重要なことだと思います。たとえば、戦国時代の後北条氏の動きとして、神奈川湊の後に位置する青木城をまず押さえるのですが、これは内陸部を押さえるために城を奪っ

たのではなく、海に勢力を伸ばすため、まず湊が必要だったからと思われます。

また、それに伴い、職人の動きにも変化が出てきます。戦国時代には鍛冶職は青木、日野（港南区）、杉田、釜利谷（金沢区）にいますが、彼らは後北条氏の御用職人として動員され集団で行動を起こすようになります。一方、浦賀には造船所が造られ、船釘とか碇とかの金物の需要がでてきます。そのため、これを青木、日野などの鍛冶職たちに作らせていくことになります。

西川　戦国時代の神奈川湊から杉田・釜利谷あたりの様子はよく分かりました。ところで、江戸時代になると、これらの地域に加えて、本牧周辺にも大きな漁村が出きてきますが、中世の本牧周辺は、どんなところだったのでしょうか。

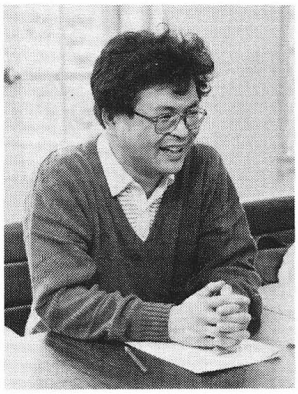
福島　本牧には間門という地名があり、これは牧場の「かんぬき」の意味だといいますから、鎌倉幕府の軍用馬の御用牧場だったのでないでしょうか。それと、本牧十二天を管理した多聞院や神奈川能満寺の本尊は、海から出現してきた薬師だというのは、興味深いですね。

西川　湊としてはどうだったのでしょうか。江戸時代には本牧の沖合で多くの船が難破し、本牧周辺の船が難破船を助けに行っていますが、湊としての機能は、中世段階からあったのでしょうか。

下山　本牧の沖は潮流が激しいので湊を造っても意味はないでしょう。

西川　いえ、荷を揚げる湊でなく、小船をだして難破船を助けに行く湊のことです。江戸時代には本牧本郷村が難破船を救援する拠点のひとつになっていますが、中世段階でも、そうした場所が有ったのではないかと思うのです。

福島　本牧十二天の江戸時代の棟札には、海が荒れることをなだめる言葉がありますし、薬師は病気をなおしたりする仏様だから、西川さんの言われたことと関係があるかもしれませんね。今後のこととしましょう。



福島金治氏

西川　そうですね。では、次に、豊臣秀吉が関東に入ってくる頃の各湊の状況について御聞きしたいと思います。

下山　秀吉が小田原を攻めた天正末年頃には、後北条氏の水軍は皆、防備の作戦上から西伊豆に移されており、横浜市域の湊の軍事的意味はなくなってしまっています。

この時期になると、房総半島の里見勢はもう相手にする必要がなくなり、秀吉の水軍に対して全勢力を注ごうということです。

西川　軍事的拠点ではなくなったが、流通の拠点という面ではどうでしょうか。

下山　戦国時代の末になると、横浜市域の神奈川湊や六浦湊は、後北条氏に反抗する土豪の出現で地位が低下し、また地理的条件などで荒れ果て、復活は江戸時代初頭まで待たなければならないのです。

西川　地位の低下が起きたのはいつ頃からなのでしょうか。

下山　天正の初年頃（一五七〇年代初頭）ではないでしょうか。軍事拠点が移されたということだけではなく、何らかの理由で川の流れが変わり、砂で埋められてしまい、湊として機能しなくなったのだと思います。湊の機能というのは十年二十年でがらっと変わってしまうものだと思います。

西川　そうすると、江戸時代のイメージで、中世の神奈川湊や六浦湊をみるわけには、必ずしもいかないですね。

福島　そうですね。中世段階の神奈川湊は、湾の外ではなく砂洲の内側の芝生寄りの場所だったかもしれないし、湊の位置の研究も必要になりますね。

西川　天正十八年（一五九〇）に徳川家康が江戸に入り、それ以後、江戸を中心とした流通機構を作っていくことになり、再び、湊の整備が進んだと言えそうですね。

下山　そうですね。入部当時の家康は、関東五ケ国を領国としたとはいえ、とてもそれだけでは彼の勢力を維持できませんから、三河、遠江の東海地区との流通を重視していたと思います。そういった意味でも、湊の整備が急務だったと思います。

西川　では、最後に、今後の研究課題についてお聞きし対談を終わりたいと思います。課題としては、どのようなことがあげられますか。

下山　私は一国支配をまかされた守護の権限が、海上のどこまで及んでいたのかということを考えてみたいと思います。例えば、武蔵と下総・上総、相模と下総・安房の国境が海上ではどこだったのかと言うことです。また海流、船の構造から派生する問題などまだまだたくさんの研究課題があります。私の勤務している横浜歴史博物館建設準備室でも、展示テーマの重点の一つとして、湊の問題を考えていきたいと思っています。

福島　湊というと遊芸場とか風俗施設の問題もありますね。

下山　人の集まるところ、往来する人々が休息する施設としては、必ず出てくる問題です。政治・経済の面だけでなく、いろいろな研究をしてみたいですね。

西川　なかなかたいへんですね。今後、この展示をきっかけに、市域の湊の研究が活性化し、さまざまな人々が研究に参加されるようになることを願っています。本日は長時間どうもありがとうございました。

（三月十七日開港資料館にて。聞き手は館員の西川武臣があたりました。）

資料よもやまばなし

写真史の源流をたずねて

以前、『F・ベアト幕末日本写真集』を刊行し、「横浜写真小史—F・ベアトと下岡蓮杖を中心に—」と題する小論を執筆して掲載したことがある。また、前回の展示「着色写真に見る明治の日本」に合わせて刊行した『彩色アルバム・明治の日本』（当館編、有隣堂発行）にも、「横浜写真の世界」と題する解説を収録した。両者を合わせれば、幕末から明治にかけての横浜における写真の歴史について知りうることは、ほぼ網羅されている。しかし、その黎明期に関しては、まだまだ不明な点が多い。写真の歴史は銀板写真に始まるが、ここで探ろうとする源流は、その次に発明され、より広く普及した湿板写真に関わるものである。

ノーウェジアンとゼジュマ

日本に湿板写真をもたらしたのは、安政四年（一八五七）、長崎海軍伝習所の医官として来日したオランダ人、ポンペ・フォン・メーデルフォールトというのが定説である。これを正伝とすると、外伝ともいうべき渡来のルートがあった。

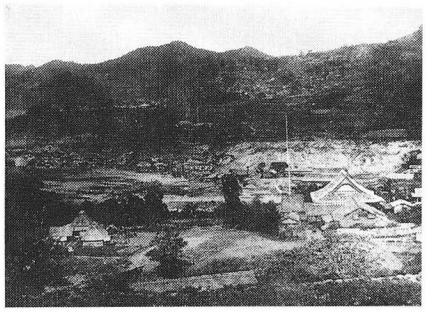
同年、出島のオランダ商館の雇用人として、ノーウェジアン（Norwegian）なる外国人が写真機を携えて来日、これに興味を抱いた日本人商人がいた。ゼジュマ（Dsetjuma）と呼ばれているが、明らかに出島をもじった仮名である。通商条約はまだ締結されておらず、商取引など日本人との自由な交流はなお制限されていた時代である。ノーウェジアンは日本人に変装し、ゼジュマの雇用人ということにして、二人で長崎のあちこちを撮影して回ったという。

ノーウェジアンは安政六年に帰国し、翌年にかけて、長崎滞在中の日記をロンドンの「フォトグラフィック・ニュース」に長期連載した。変名を用いたのは、国禁を犯したゼジュマに累が及ぶのを防ぐためだという。その記述が事実だとすると、大名やその家臣を別として、庶民としては、ゼジュマが日本人アマチュア・カメラマンの第一号ということになる。（Clark Worswick, *Japan : Photographs 1854-1905*, New York, 1979, PP. 137-8.）

ロシエとネグレッティ&ザンブラ社

最初に来日した職業写真家は、安政六年に長崎を訪れたフランス人ロシエ（Rossier）である。ロンドンのネグレッティ&ザンブラ社（Negretti & Zambra）の特派員として中国に派遣され、日本にも足を伸ばしたのであった。日本人の記録に「英人」として現われるのはそのためであろう。

ロシエの滞日中の事績はほとんど不明だが、確かな記録に、一八六〇年（万延元年）十月十三日付の長崎駐在英領事モリソンの公使オールコックあて公信がある。造成中の大浦居留地の様子を本国に知らせるために、ロシエに撮影を依頼した写真について報告したものである。イギリス外務省の文書のなかには、この報告とともに送られた、大浦居留地を中心とする三枚組と、長崎港の全景八枚組の二種類の写真が綴り込まれているが、後者のうち出島を写した一枚は、他に転用されたためか欠落している。



ロシエの撮影した万延元年夏の長崎風景
右手の大きい建物は、イギリス領事館の置かれていた妙行寺。　F.O. 46, Vol. 8, 1860, Despatch No. 68, Incl. 1, P. 267

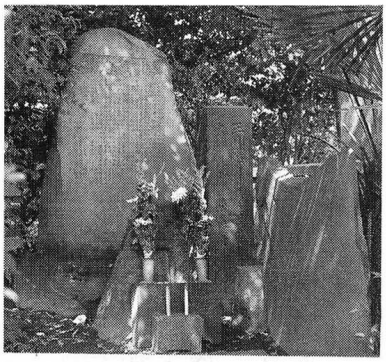
ロシエは横浜にも赴いて撮影を行なったといわれており、おそらくそれが写真に収められた最古の横浜の風景であろう。その作品はネグレッティ&ザンブラ社の手で焼き増しされ、アルバムのかたちで販布されたものと思われる。

フリーマンと鵜飼玉川

日本人職業写真家第一号の候補者としては、鵜飼玉川・島嘉国・大鐘隆慶といった人々の名が上げられている。誰が本当に最初なのか。「横浜写真の世界」を執筆するにあたって、この問題を改めて検討してみようと思い、九州産業大学の小沢健志先生にお願いして、いくつかの資料のコピーをいただいた。そのなかに、「七十四年前の湿板—鵜飼翁の写真塚から発掘」と題する「サン写真新聞」昭和三十一年十月二日号の記事がある。写真塚とは、鵜飼玉川が、明治十六年、自身の撮影した写真を東京谷中の墓地に埋めたものである。そこに玉川の経歴を記した「写真冢記」の碑が建てられている。玉川はその四年後に死去し、塚の脇に埋葬されたが、墓碑にも経歴が記されている。塚の発掘は九月三十日、同新聞社によって行なわれ、何枚ものガラス板写真が発見された。その複写プリントを小沢先生から頂戴し、そのうちの一枚を、原所蔵者である玉川の曾孫、鵜飼幸雄氏の許可を得て『明治の日本』に掲載させていただいた。

谷中に玉川の墓碑を訪ねたのは今年の一月九日、薄日をたよりに、かじかむ手で「写真冢記」と「玉川翁墓碑銘」を筆写したのを思い出す。これらに、玉川が開港直後の横浜で、フリーマンというアメリカ人から写真術を習った

ことが記されているのである。この碑文は、活字のかたちでは公表されていないと思ったので、全文『明治の日本』に掲載した。ところが、刷りあがった本を鵜飼氏に献呈したところ、礼状に添えて、市川任三氏の「東都両国薬研堀写真師鵜飼玉川小記」(『立正大学教養部紀要』二二号、平成元年三月二日)の恵与を受けた。見ると、「写真家記」には句読を付し、「墓碑銘」は書き下し文で全文が紹介されている。玉川が配布した「写真鏡大意」というチラシなどの新資料を始め、玉川に関する資料にはすべて言及しておられる。先行研究としてここに紹介する義務があろう。



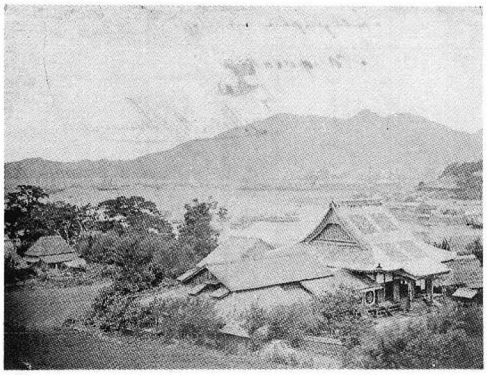
鵜飼玉川の「写真冢記」の碑(右)と墓碑
谷中墓地甲3号4側9

結局、私が付け加えた新事実は、その師フリーマンに関することだけである。万延元年初頭に来日し、横浜居留地で雑貨商を営んでいたフリーマン(Orrin E. Freeman)が、写真機を輸入して肖像写真の撮影に応じたこと、その仕事を「ある日本人」に譲渡したが、それが玉川と考えられることなど、詳しくは「横浜写真の世界」をご覧いただきたい。今日知りうる資料の範囲内でいえば、横浜最初の営業写真家はフリーマン、日本人最初のそれは鵜飼玉川、前者は万延元年、後者は同年か翌文久元年の開業と判断される。なお、「サン写真新聞」によると、発掘された写真のなかに、彩色された外国人少女像があるという。現存最古の彩色写真である。玉川がフリーマンから譲り受けた写真の一枚なのではないか。

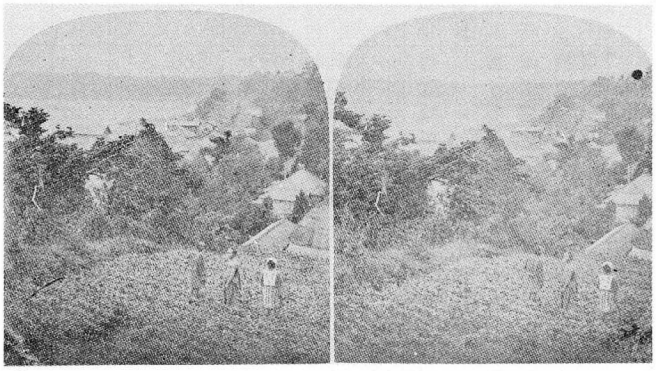
ガワーのステレオ写真

一八六一年(文久元年)六月一日、香港から帰任した英公使オールコックは、長崎領事モリソン、公使館員ガワー(Abel Anthony James Gower)、画家のワーグマンらとともに、長崎から陸路江戸へ向かった。オールコックの著作『大君の都』には、奈良から笠置へ向かう途中、ガワーが大名の邸宅を「写真に撮ることに成功したが、それをここにかかげるだけの値打ちはほとんどない」という記述が見られる。同書にはワーグマンのスケッチがいくつか掲載されているが、ガワーの写真に対してはかなり冷たい態度である。

A.A.J. ガワー肖像



ガワーの撮影した妙行寺と長崎港
これも幕末期のものであろう



ガワーのステレオ写真　神奈川の丘から台町と戸部方面を望む。
1861年7月頃の撮影と推定される

実はガワーもネグレッティ&ザンブラ社と特派員契約を結び、ステレオ・カメラを携えていたのであった。彼がこの旅行中に撮影した写真は、同社の手で"Views of Japan"というアルバムにまとめられ、販布されたようである。そのうちの六枚が"T.C. Westfield, *The Japanese; their Manners and Customs* (London: Photographic News Office)に貼付されている。本誌巻頭の神奈川湊の写真はその一枚である。当館所蔵の横浜市域の写真としては、いまのところこれが最も古い。なお、当館には、彼自身の肖像と彼が江戸と長崎で撮影した写真が収蔵されている。(ガワーについては、山本有造「三人ガワー」〈京都大学人文科学研究所『一九世紀日本の情報と社会変動』所収〉、藤田英夫「ガワー兄弟と神戸」〈『神戸史談』二五七号〉参照)

ロシエとガワーのアルバムや、一八六二年に横浜を訪れたイギリス人職業写真家ソンダース(William Saunders)の作品などは、イギリスを始めヨーロッパ各地を探せば発見できるのではないだろうか。ひょっとすると、ノーウェジアンとゼジュマの撮影した写真も存在するかもしれない。古い時期の風景写真は、希少価値のみならず、歴史資料としての価値も高い。いずれ所在を突きとめて紹介したいものである。

(斎藤多喜夫)

横浜新風土記稿 ⑩

横浜市域の製糸工場

1　はじめに

現在の横浜市の市域が最終的に確定したのは、戦時色が濃くなりつつある一九三九年四月である。現市域のほぼ西側半分にあたるこの時の合併地域(現在の栄・戸塚・泉・旭・瀬谷・緑区、および港北区の一部)は、それまでは南関東の農村一般と同じような農村地帯であったようだ。今回は、この地域の養蚕・製糸業の展開の具体的様相をさぐり、現市域内に昔あった「農村」のイメージを固める一助としたい。

2　横浜市域の製糸工場一覧

第1表は六つの資料(『神奈川県統計書』ないし『工場通覧』。詳しくは第1表の注を参照)から摘出した橘樹・都筑・鎌倉郡に設立された製糸工場のリストである。表の年次別職工数の欄の空欄は、その年次に関する資料にその工場が載っていないものである。

第二次大戦以前には、現在の横浜市域は、旧久良岐・都筑・橘樹・鎌倉郡の一部と(合併のたびにこれら四郡を蚕食して拡大する)旧横浜市に相当する。したがってこの四郡・一市を対象にす

第１表　橘樹・都筑・鎌倉郡の製糸工場

郡	工場名	所在地	創立年月	職工数 1899	1904	1910	1909	1916	1920
橘樹郡	①関口製糸場	高津村溝口	1895. 7	28	a 18				
	②河北製糸場	神奈川町神奈川	1896. 6	51					
	③関山製糸場	稲田村	1900. 6		29				
	④亀ヶ谷製糸所	宮前村	1905. 4			45	e 46		
都筑郡	⑤太陽製糸工場	都田村川和	1896. 5	c 61	105				
	⑥安藤製糸場	山内村石川	1895. 3	51	b 32	a 47	h 45		
	⑦黒沼製糸場	山内村石川	1898. 3	33					
	⑧今井製糸場	二俣川村二俣川	1891. 4	36					
	⑨和田製糸場	二俣川村二俣川	1894. 2	31	29	49		b 40	b 41
	⑩鈴木製糸場	二俣川村二俣川	1896. 2	28					
	⑪清水製糸場	二俣川村今井	1897. 1	44	41	b 41			
	⑫和田製糸場	二俣川村二俣川	1899. 9	24					
	⑬清水製糸場	二俣川村今井	1908. 7				i 31	c 44	c 59
	⑭長野製糸場	中里村	1917. 7						14
鎌倉郡	⑮持田製糸場	中和田村上飯田	1889. 4	104	d 88	d130	g118	a230	d174
	⑯清水製糸場	中和田村和泉	1893. 6	22					
	⑰宮崎製糸場	中和田村上飯田	1893. 6	42	c 82	c 81	f 108	176	325
	⑱和泉館	中和田村和泉	1896. 1	116	65				
	⑲大矢製糸場	中和田村和泉	1907. 6			52	b 31		
	⑳カク十尾沢組	中和田村和泉	1907. 6				100		
	㉑横山製糸場	中和田村和泉	1911. 6					32	44
	㉒清水製糸場	中和田村和泉	1916. 9					53	85
	㉓川口製糸場	瀬谷村瀬谷	1894. 3	60	80	98	c104	60	
	㉔石井製糸場	瀬谷村瀬谷	1895. 4	a 50	50				
	㉕仙田製糸場	瀬谷村瀬谷	1898. 6	30	48				
	㉖小沢製糸場	瀬谷村瀬谷	1898. 8	8	28	61	37	40	
	㉗小野製糸場	瀬谷村瀬谷	1900. 6		25				
	㉘本郷製糸場	瀬谷村瀬谷	1902. 6		30	g 95	a 73	75	a 90
	㉙守屋製糸場	瀬谷村瀬谷	1904.12		25	30	21	27	44
	㉚改良合名会社	中川村阿久和	1890. 5	155	136		102		
	㉛大剛館	中川村阿久和	1894. 3	b 35	e 41				
	㉜岸松館	中川村岡津	1894. 3	49					
	㉝小林製糸場	中川村阿久和	1896. 9	30					
	㉞小林製糸場	中川村阿久和	1898. 4	20					
	㉟小糸製糸場	中川村上矢部	1902. 6		34	41	k 42	34	
	㊱大剛分館製糸場	中川村	1903. 6		31				
	㊲小原製糸場	中川村	1903. 6				42		
	㊳相原製糸場	中川村阿久和	1903. 6		21	23	19		
	㊴相原工場	中川村阿久和	1903. 6				j 41		
	㊵田中製糸場	中川村	1904. 7		33				
	工場数			23	22	13	16	11	9
	職工数合計			1108	1071	793	960	811	876

製糸工場の商標

宮崎製糸場　鎌倉郡中和田村

小林製糸場　鎌倉郡中川村

〔第1表の注〕

工場名・創立年月は原則として最も古い資料に拠った。所在地も同様にし、後年の資料で補った。経営の同一性は、これらのデーターで判断した（表中の年次別アルファベットに応じた下記のコメントを参照)。資料は、1899・1904・1910年が『神奈川県統計書』、1909・1916・1920年が『工場通覧』、1920のみ年初、ほかは年末のデータ。1909年調査は職工5人以上使用工場が、1916・20年の調査は職工10人以上使用工場が対象。《コメント》〔( )内は所在地・工場主・設立年月〕【1899】a=石川製糸場(瀬谷1895.4) b=大岡館(阿久和1894.3) c=太陽合資会社製糸場(川和1896.5)【1904】a=生糸製造所(高津村1895.7) b=盛進社安藤製糸場(山内村1895.3) c=盛進社宮崎製糸場(中和田村1893.3) d=盛進社持田製糸場（中和田村1889.6) e=大剛館製糸場（中川村1894.3) g=改良合名会社(中川村1891.2)【1910】a=盛進社(山ノ内村1895.3) b=清水製糸場(二俣川村1892.1)〔1906調査『工場通覧』では清水製糸場（二俣川村二俣川、清水長右衛門1892.1、職工数41)〕 c=盛進社宮崎製糸場(中和田村1893.3) d=盛進社(中和田村1899.5)【1909】a=本郷館製糸場(瀬谷1902.4) b=大矢製糸場（和田村和泉1907.6) c=川口製糸場（瀬谷1884.3) e=南武社（宮前村、亀ヶ谷金太郎1905) f=盛進社宮崎製糸場(上飯田1893.3) g=盛進社(上飯田、持田初次郎1889.5) h=盛進社(山田村石川、安藤五郎左衛門1895.3) i=清水製糸場(二俣川村今井、長谷川鹿蔵1908.7) j=県統計では相沢製糸場（阿久和、相沢要太郎1903.6) k=県統計による【1916】a=盛進社持田製糸場（中和田村1899.5) b=和田製糸場（二俣川村、和田菊之助1894.2) c=清水製糸場（二俣川村、清水金太郎1908.7)【1920】a=本郷館製糸場（瀬谷村1902.3) b=和田製糸場（二俣川村二俣川、和田菊之進1912.4) c=清水製糸場（二俣川村、清水金太郎1907.7) d=盛進社持田第一工場（中和田村1899.6)

れば、市域内の製糸工場を調べるには十分である。調査の結果、久良岐郡・横浜市内には、表中の②の神奈川町の河北製糸場を例外として、製糸工場の存在が認められなかった。そのため第一表は三郡のリストとなっている。

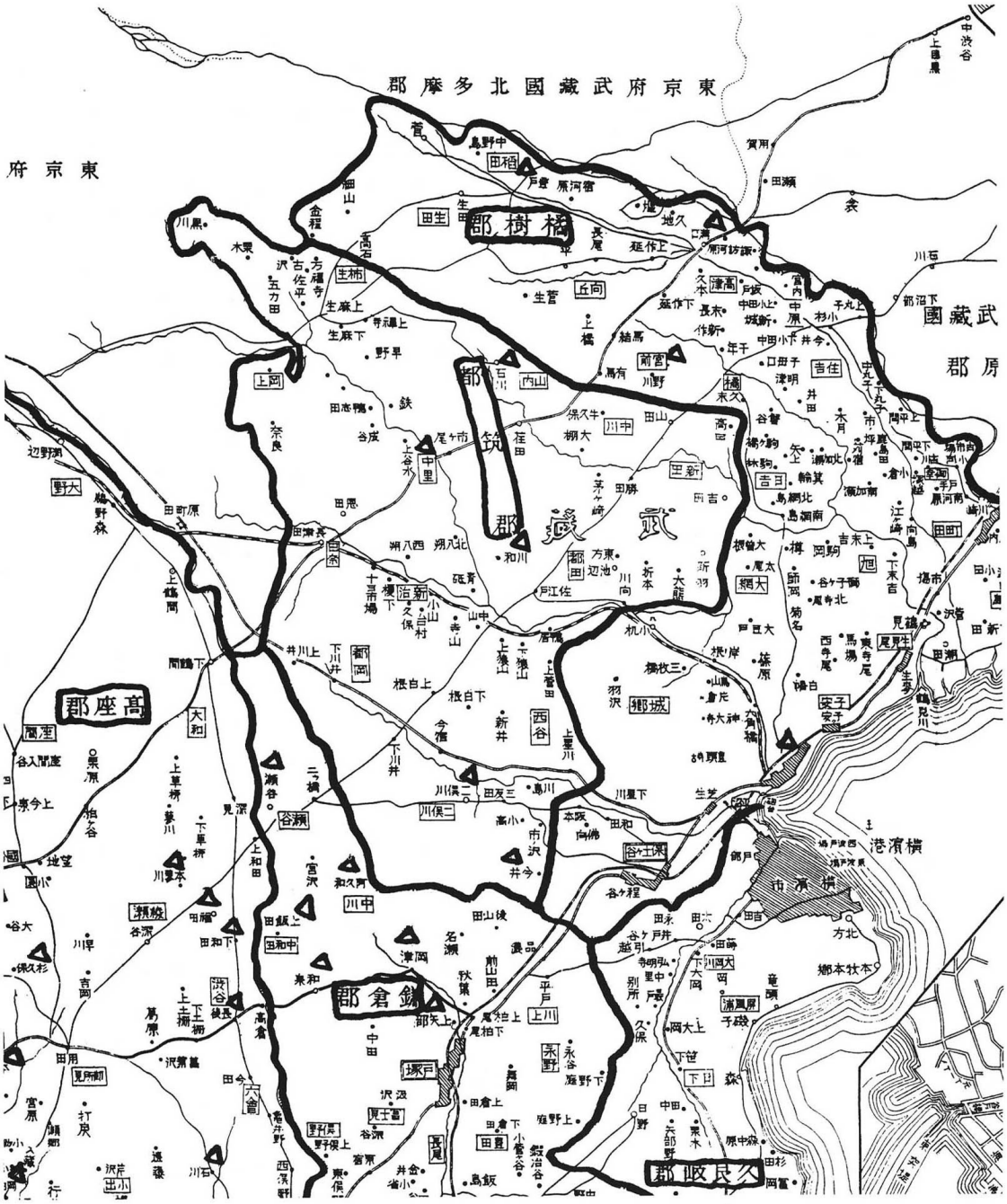
さて、第一表を検討しよう。一八九九～一九二〇年にわたる六つの資料でこの三郡内での存在が確認された製糸工場は、四〇に上る。このうち①②④は現在の川崎市域に存在し、残り三七工場が現在の横浜市域に相当する地域に存在した製糸工場である。

第一に明らかなのは、製糸工場が二俣川・中和田・瀬谷・中川村の四村に集中的に設立されたことである。もっとも、横浜市域にこだわらなければ、瀬谷村から境川を越えた高座郡の渋谷村(福田・下和田・長後)・綾瀬村(本蓼川)にも、一八九九年には六工場があり、これは瀬谷など四村から続いて一つの製糸工場地帯を形成していると見られる。つまり、ほぼ現在の相模鉄道の二俣川～さがみ野駅の沿線で製糸工場がたくさん設立された。次の頁の地図の中のムラ（大字＝一八八九年以前の村で地図上の何も付いていない地名）のうち、△印を付けたのが、製糸工場が設立されたムラである。(ただしムラ不明のものは四角でかこってある合併村名に付した。また高座郡内の△印は一八九九年所在のもののみ。)

第二は、製糸工場が創立された時期である。第1表によれば、表出の四〇工場の創立年次は、一八九九年の⑮が最初で、以降、一八九〇～九四年が八、一八九五～九九年が一四、一九〇〇～〇四年が一〇、一九〇五～〇九年が四、一九一〇～一九年が三、である。すなわち日清戦争をはさむ一八九〇～一九〇四年が市域の製糸工場の設立のブームであった。

このうち一番初めに創立された⑮について、『神奈川県ノ蚕糸業』（神奈川県内務部、一九一八年）は、「器械製糸ハ明治二十二年鎌倉郡中和田村故持田角左衛門氏カ横浜市本町若尾幾造氏ノ後援ヲ得テ初メテ器械製糸工場ヲ創立セルヲ嚆矢トシ邇後各地ニ工場増設セラレ今日ニ至レリ」としているから、この⑮はたんに市域に限らず、県下で最も早い設立となる。もっとも、『神奈川県統計書』を古い順に見ていくと一八八一年頃から三多摩地方の製糸工場の設立が続き、また津久井郡にも一八八一年や一八八八年に製糸工場が一つ存在したことになっている。(ちなみに三多摩地方＝南多摩・北多摩・西多摩郡は一八九三年に神奈川県から東京府へ移管された。)

第三は、第1表の推移にみられる明治中期以降の器械製糸業の発展の程度である。目安として工場数・職工数の各年次ごとの合計をみると、工場数は一九〇四年以降減少の一途で、また職工数も一八九九年水準に到達しない。つまり、明治中期に前述の地帯で小規模の器械製糸場が続々設立されたにもかかわらず、それらの多くは、比較的短期に廃業している。また、生き残っ



第２表　1931年末の鎌倉郡の製糸工場

工場名	所在地	開業年月	職工数
合資会社佐久社相模工場	中和田村上飯田	1926. 3	264
合資会社相模社製糸場	中和田村上飯田	1893. 3	221
山村製糸工場	中和田村和泉	1917. 1	53
合資会社守屋製糸所	瀬谷村瀬谷	1905.11	85
川口製糸株式会社	瀬谷村瀬谷	1902. 4	285

（注）『神奈川県工場名簿』（神奈川県内務部統計調査課、1933）による。対象は職工５人以上使用工場。

た工場にしても、⑮⑰などは職工数を大幅に増やしたが、そうした工場は少数で、その大規模化の程度も、市域の職工数を増やすにはほど遠かった。一九三一年末には久良岐・橘樹・都筑・鎌倉郡・横浜市に存在する製糸工場は、第2表に見られる鎌倉郡の五工場（職工数合計九〇八）に過ぎなかった。（なお、工場の質を考えれば、職工数は、繰糸する釜の数より若干多い程度と考えてよいだろう）

〔続く〕

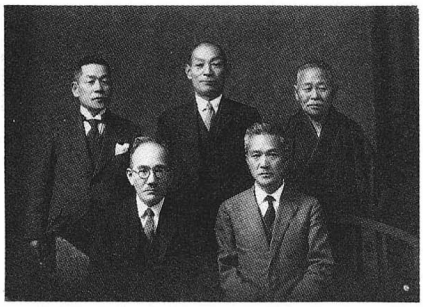
（井川克彦）

横浜人物小誌 ㉒

横浜市史編纂主任 加山道之助

加山道之助は、雅号を可山、頑愚洞と称し、俳句を詠み、全国各地の郷土玩具や横浜開港以来の風俗史料を集めては成趣会（のち尚趣会）など同好人のサロンを催し、また史料・史蹟の調査に従事し、歴史編纂事業に参画した。補陀落山荘原田久太郎、香楽庵設楽己知、武溪荘新堀源兵衛、また五味亀太郎らとともに、戦前の趣味人、横浜史料蒐集家として懐しい名前であった。

加山は、明治一〇年（一八七七）石川仲町に質商由五郎・千代の長男に生れた。横浜商業学校を卒業、関内の真砂町二丁目に質舗を構えて家業とした。日露戦役に第三軍所属の特務曹長として出征、奉天会戦で頭部貫通銃創を受け、右手の自由を失った。『貿易新報』明治三八年四月二〇日～二三日付に、「渋谷の花吹雪」と題し、陸軍予備病院渋谷分院に入院中の加山曹長への探訪記事が連載されている。のち廃兵会を興し、『横浜成功名誉鑑』（四三年）には「横浜廃兵会々長」とある。出征前から俳句に親しみ、郷土玩具や千社札、天神様の書画・玩具、開港時代の錦絵・版画、草紙、番付などを蒐集し、真砂町の加山質店は、一種同好人士の文芸サロンの態をなしたという（加山達夫『ここに泉あり』、私家版）。しかし大正一二年（一九二三）の関東大震災で質舗と蔵は焼失、貴重な蒐集品は灰燼に帰した。震災後、鶴見仲町（鶴見区）ついで篠原町仲手原（港北区）に転居、史料や史蹟調査、郷土史編纂に深く関わることになる。昭和一五年（一九四〇）病臥、来訪者の「芳名帖」七冊を遺し、一九年一〇月二八日他界した。享年六八歳。法名、可山院道譽頑愚逸仙居士。以下、加山の幅広い活躍のなかで、横浜市史編纂への関わりに焦点をあて素描を試みたいと思う。



市史編纂係解散の日に
右から前列編纂主任加山道之助、前主任堀田璋左右、後列編纂員中山毎吉、同弦間冬樹、同岡太郎（加山達夫氏寄贈）

横浜の市史編纂事業は、大正九年（一九二〇）に始まる。編纂事業費として六五九八円が計上され、市史編纂主任堀田璋左右はじめ大塚武松、石野瑛ら七名の嘱託員が任命され、教育課所轄（翌年から庶務課）のもと史料収集が開始された。同年一一月、加山は新堀源兵衛、渡辺和太郎、曽我部俊治らと市史編纂相談役を委嘱されている。しかし、これ以前加山らは横浜史談会を設立、大正四年七月二日に第一回開港史料展覧会を横浜公園に催し、また史蹟保護を建議した。翌五年、横浜市は名勝史蹟天然記念物等保存調査臨時委員会を設置、委員会は英国領事館構内の玉楠を筆頭に六名木を選定した。史談会は、横浜市の史蹟・文化財保護行政の端緒を拓いた。市史編纂が本格的に開始され、市の内外から膨大な関係資料が集められたが、関東大震災で市役所とともに炎上し、烏有に帰した。この中には、万延元年の遣米使節随員の渡航日記や写生帖などもある。しかし、編纂事業は翌年から再開され、火難を逃れた歴史資料の収集に全力が挙げられた。この時に作成された古文書・古記録の筆写本約六五〇冊が、現在当館に保管されている。橘樹郡鶴見町の旧家佐久間家の記録には、大正一五年六月五日「横浜市史料編纂ノ為メ古文書ヲ一覧セント午前十時頃市ノ嘱託員文学士堀田（璋左右ー注）殿事務員弦間冬樹殿ト中町（鶴見仲町ー注）ニ居住シヲル加山道之助ノ三人来訪」とある。こうした史料収集の成果を基に、『横浜市震災誌（未定稿）』全五冊、『横浜史料』、ついで『横浜市史稿』全一一巻が刊行された。その経緯は、同書索引の「編纂の顛末」に詳しい。加山は、昭和二年（一九二七）三月市史編纂員、翌三年四月一日堀田転出の後を襲って編纂主任となり、編纂事業の中心となって自からも風俗編一巻を著した。市史編纂係は、『横浜市史稿』完結後の八年四月二〇日に解散したが、翌九年、横浜史料調査委員会が「市内ニ於ケル史蹟、名勝、史料其ノ他ニ関スル調査」（規程第一条）を目的に発足した。委員は、加山のほか栗原清一、磯貝正、山崎小三、添田坦、佐久間道夫、軽部三郎ら。三月二日に初会、以後月例会を開き、研究調査報告や協議を重ねた。委員会はまず史蹟標建立地の選考に始まったが、翌年の復興博などに協力し、またE・モレルら日本文化に貢献した外国人や物故市長などへの慰霊展墓を企画、恒例とした。委員会は、加山病臥中の一八年三月、市民博物館（震災記念館を改称、一七年八月三一日開館）評議員会へと発展解消した。史料調査委員会の調査研究報告などは、時局柄多くはガリ版刷り、また散逸が著しく、その成果は纏まった形で今日に伝えられていない。断片的に当館ほかで所蔵するが、このたび加山の長男達夫氏から、同委員会の初期資料を中心に、蒐集史料が当館に寄贈された。加山ら同委員会の仕事については、いずれ稿を改めたいと思う。

（佐藤　孝）

閲覧室から

当館では、今年度末に『横浜開港資料館所蔵　新聞・雑誌目録（仮称）』を刊行し、あわせて横浜で発行された新聞・雑誌を展示する予定です。現在整理を急いでいるところですが、ここでは閲覧できるものの中から順次紹介したいと思います。今回は、比較的よく知られている風刺雑誌を取り上げてみました。この二つのほかにも興味深いものがあり、展示で紹介するほか閲覧に供したいと思います。

○ジャパン・パンチ（Japan Punch）

ワーグマン（Charles Wirgman）により一八六二年（文久二）に発行され、風刺雑誌のはしりとして知られている。通し番号は付いていないが、おおむね月刊。当初は木版刷りで、一八八三年（明治一六）から石版刷りに変わる。また、一八八六年（明治一九）二月より発行所にマイクルジョン社と記されるようになる。内容は、外交問題や居留地内の出来事を取材したものが多く、居留民の似顔絵が豊富に盛り込まれ、歴史資料としても貴重なものといえよう。一八八七年（明治二〇）三月号で廃刊。復刻版で閲覧できる。

○トバエ（Tôbaé）

フランス人、ジョルジュ・ビゴー（Georges Bigot）が一八八七年（明治二〇）二月に創刊し、月二回発行。ワーグマンの「ジャパン・パンチ」にとってかわった。当時ビゴーは東京に住んでいたが、横浜海岸五番のクラブ・ホテルを発行所としている。居留地内の出来事を扱ったものの他、鋭い政治風刺に特色がある。一八八九年（明治二二）廃刊。

この他ビゴーの発行したものとしては、一八九〇年（明治二三）創刊の「ポタン・ド・ヨコ」（Potin de Yoko）、その改題誌の「ポタン」（Le Potin）、一八九〇年（明治二三）創刊で、風俗画を多く掲載した「ヴィ・ジャポネイズ」（La Vie Japonaise）がある。

以上はいずれも複製本で閲覧することができる。（以下次号）（上田由美）

資料館だより

行事開催予定（平成二年度）

▼展示

(1)『江戸湾の歴史―中世・近世の湊と人びと』　5／3～7／29

(2)『生糸貿易の盛衰と日本製糸業』（仮題）　8／1～10月下旬

(3)『横浜の庶民文化』（仮題）　11月上旬～1月下旬

(4)『横浜の新聞と雑誌』（仮題）　2月上旬～4月下旬

▼講座（各全五回　詳細未定）

(1)『横浜の庶民文化』展記念講座（一一月から）

(2)資料講読会（平成三年一月から）

(3)『横浜の新聞と雑誌』展記念講座（平成三年一月から）

▼歴史講演会

(1)『横浜開港と港西』　5／27（日）午後一時　西地区センター（西区岡野一丁目）　講師内田四方蔵　当日会場にて受付　受講料無料

(2)『江戸湾の歴史―中世・近世の湊と人びと』展記念講演会　「江戸時代の湊と漁村」　6／2（土）午後一時半　当館講堂　講師山口徹・青木美智男　往復はがきにて受付　受講料五〇〇円

ミニ情報

▼寄贈資料

(1)中沢岩太旧蔵肖像写真アルバム　六八点（足立区竹の塚　渡辺三代史氏）

(2)廣瀬家資料　六六点（市川市八幡　廣瀬貞子氏）

(3)渡辺勝三郎旧蔵シンガーミシン　一点（武蔵野市吉祥寺　下村富美子氏）

(4)渡辺勝三郎関係資料　三九点（東京都世田谷区上馬　渡辺正直氏）

(5)加山道之助収集横浜資料　二八五点（町田市成瀬台　加山達夫氏）

(6)増田知関係資料　一五点（東京都品川区北品川　増田猷子氏）

(7)大浜忠三郎一家写真　一点（東京都目黒区中目黒　大浜忠一氏）

(8)消防頭巾　一点（南区榎町　新堀シサ氏）

(9)弁天通絵葉書　一点（堺市　新田留吉氏）

(10)各種絵葉書　九一四点（磯子区原町　小沢茂氏）

▼出版物

『吉村屋幸兵衛書簡』復刻版　頒価二五〇〇円

『波乱の半世紀』頒価一二〇〇円

『江戸湾の歴史』頒価一二〇〇円

▼映画

(1)「横浜歴史散歩―幕末の写真家F・ベアトとともに」16ミリカラー　17分（VHSビデオ版　頒価三五〇〇円）

(2)「波乱の半世紀―横浜市の誕生から戦後復興まで」16ミリカラー　12分

◎いずれも、二階展示室のビデオでご覧になれます。

▼無料入館のお知らせ

◎6月2日（土）は、横浜開港記念日に当たりますので、展示室への入館は、無料となります（閲覧室ご利用の際は有料です）。

▼閲覧室の休室

6／26（火）～29（金）は、図書整理のため閲覧室を休みます。